

第 37 回土木計画学研究発表会(春大会) : 2008.6.6~7(北海道大学)
 企画論文部門, 若手研究者論文部門 セッション討議内容の記録

セッション名 : 高齢者・障害者の自立生活および長寿健康社会福利に向けた地域福祉交通システム (1)	
日付 : 6月 6日 (金) 曜日, セッション時間 : 14 : 00 ~ 15 : 30	
オーガナイザー・司会者名(所属) : 北川博巳 (兵庫県立福祉の街づくり工学研究所)	
討議内容	<p>セッション全体 : 高齢者・障害者の自立生活を支援するための交通については、福祉の交通研究小委員会のメインテーマであり、今回は歩行問題から高齢者の QOL を高めるための評価論まで幅広い議論ができた。トピックとして、第一に長寿健康社会づくりに必要な要素として、歩行空間整備の重要性が改めて認識された。歩いて健康を維持するためには、転倒防止はこれからの重要な課題である。第二に、これからの高齢社会にとって必要な概念である、QOL と社会基盤との関係を結び付けるような評価の必要性が指摘された。たとえば、福祉移送サービスと高齢者・障害者との QOL の関係、および外出も含めた屋外活動に対する QOL との関係など、スケールを合わせて評価する必要がある。第三に、健康長寿社会は高齢者の能力を維持することに主眼が置かれているが、高齢者についても人間として成長と発達をもっと考えねばならないことも提起された。</p>
	(発表番号) 発表者名 (所属) : No.160 磯部友彦 (中部大学)
	<p>Q1. 摩擦係数は2つの物質 (路面と靴との関係など) が関与している。よって、この研究で実施した計測器では、靴と比べたときの値としてよいのか? また、様々なバラエティに適応できるのか?</p>
	<p>A1. 今回測定した機器はゴムタイヤで走行させた時の摩擦係数を計測することができる。このタイヤ部分を変化させると対応は可能であるが、すべて同じ条件で計らないと比較できないので今回はそのようにした。</p>
	<p>Q2. 歩行者をターゲットとした時、歩き方や靴との関係など、摩擦係数だけで評価できないのではないか?</p>
	<p>A2. もちろん摩擦や人の能力との関係が問題となり、摩擦力の適度さを追求する必要がある。たとえば摩擦力の強すぎる路面でも転倒などの危険性があるため、この研究をもう一段階広げる必要がなる。</p>
	<p>Q3. 人間工学的に、人による違いはどの程度分かっているのか?</p>
	<p>A3. たとえば、リハビリ側では個人因子について多くの研究がなされている。高齢者がすり足になる理由の分析やつまづき転倒が多いことも分かっている。そのためには適度な摩擦が必要となる半面、個人と環境の問題をどうするか課題である。この研究のアプローチとしてはもちろん環境側の整備を対象にした研究になるが、建築分野でもやっているが、まだよく分からない。</p>
	<p>Q4. 自動車が路面走行する場合は各種の基準がある。その理由として、タイヤの基準は考えやすいためだと思われるが、靴の側ではどういう条件があるのか? そのような側からからも考慮する必要があるのでは?</p>
	<p>A4. 歩行者を対象にしたときは、歩くだけでなく走ることやその他様々な状況を考える必要がある。非常に多様な状況が考えられるため、なかなか対応が難しい部分もある。また、湿潤時やちりやほこりなど路面のメンテナンス問題もあるので、さらに難しいものになっているのかもしれない。しかし、今回の研究で分かったことは、同じ舗装状況でも摩擦係数が変わっていたた</p>

め、区間を連続的に計る必要性を示した意味では価値があるのでないかと思う。

Q5. 一番良く計測されているスキッドテスターや東工大式のすべり測定器、およびこの研究で測定した機器もともに静摩擦係数を計測している。動摩擦係数も計る必要があるのではないか？

A5. 積雪時などを考えると動摩擦でやる必要も感じている。

(発表番号) 発表者名 (所属) : No.161 北川博巳 (兵庫県立福祉のまちづくり工学研究所)

特に質疑なし。

(発表番号) 発表者名 (所属) : No.162 山田稔 (茨城大学)

Q1. 地区によって移動手段の割合が違うのは何となく分かるが、地区による違いについて補足してほしい。

A1. 一地区だけ非常に徒歩の割合が高くなっている場所があって、その理由として、都市の形がちがってくるからである。そのため高齢者の移動手段が限られており、自治体でも問題意識は持っている。具体的には学区ごとの公共交通委員会の検討をしている。

Q2. この研究の到着点は外出頻度を増やすことにあるのか？地域住民の QOL なども考慮した計画づくりも必要では？

A2. 交通は目標達成のための手段の一部なので簡単に QOL を組み込むことはむずかしい部分もある。QOL にどのように組み入れるのかは課題である。

(発表番号) 発表者名 (所属) : No.163 新田保次 (大阪大学)

Q1. この研究では、旅行が違うフェーズに入っているような気がして、ちょっと抵抗がある。

A1. 目的に対するウエイトは人によって代わるものだと思われ、今回は調査からこの場所に入れている。もちろん詰めてゆく必要がある。

Q2. 今回の研究は ICF を考慮した、体の機能の面からの研究であるが、WHO が出している実際の概念を見ると訳しづらい「スピリット」という項目がある。日本版でも何か考える必要があるのか？

A2. 今回は心の部分はまだ課題である。そのあたりをどのように盛り込むかはまだ分からない。